

第41回全国中学生人権作文コンテスト福島県大会  
最優秀賞（福島地方法務局長賞）

## 私なりのノブレスオブリージュ

郡山市立高瀬中学校 2年 小林 綾莉

ノブレスオブリージュという言葉聞いたことがあるだろうか。ノブレスオブリージュとは「身分の高い者はそれに応じて果たさねばならぬ社会的責任と義務がある」（コトバンクより引用）という意味のフランスの諺だそうだ。欧米では、成功した人はその富を自分のためだけに使うのではなく、社会にそれをお返しする義務がある、という価値観が根付いているという。私は高い身分でもないし、お金も何も持っていない。そんな無力な私にはできることはないのだろうか。

私が小学5年生のときだ。市のイベントの宿泊学習会で、ある女の子と出会った。優しく面白くて、とても親切な人だった。人見知りの私に彼女は親切に話しかけてくれ、すぐに仲良くなった。彼女はある病気を抱えていた。それがなんの病気なのかは、今も詳しくは分からない。ただ、病気の影響で髪が少ししか生えないという症状があるそうだ。宿泊学習会のお風呂の時間に、その症状について打ち明けられた。普段はウィッグを被っているから、言われるまで全く気がつかなかった。

彼女の病気のことを知ってしばらく経ったある日、テレビで「ヘッドネーション」の特集をやっていた。ヘッドネーションとは、病気や事故などで髪が生えていない子供たちに、寄付された髪でウィッグを作って無償で提供する取り組みのことだ。私は、そのような取り組みがあることに驚いた。そして、真っ先に頭に浮かんだのは、宿泊学習会で出会ったあの女の子だった。彼女のあのウィッグもヘッドネーションによるものだったのだろうか。彼女のことを考えると、私も髪を寄付したいと思った。しかし、寄付のためには三十一センチ以上の髪が必要だという。正直なところ、三十一センチもの髪を切ることはためらいがあった。当時の私の髪の長さでは、三十一センチもカットをしたらベリーショートの髪型になる。ずっと長い髪だった私は、そこまで短くした髪で学校へ行くのは恥ずかしかった。似合わないと思われるのではないかと不安だった。

しかし、宿泊学習会で出会ったあの子には、私のように髪型に悩む余裕も、選ぶ自由もなかったはずだ。そして、あの子のような人がきっと世の中には沢

山いて、その子たちの不安はもっと大きいものだろう。私の髪は切ってもまた伸びる。自分の髪がその子たちの不安を解消するお手伝いになるのなら、髪が短くなるなんてどうってことのないように思えた。そして、私は髪を寄付しようと思決した。

ヘアドネーションの当日は、なんだか朝から落ち着かなかった。美容院に着くと、私はまず美容師さんに質問をした。「私のような癖っ毛でも寄付できるんですか。」ヘアドネーションをすると決めてから、それがずっと心配だった。こんなに癖の強い髪のウィッグで喜んでくれるだろうか。しかし美容師さんは「大丈夫ですよ。どんな髪でもウィッグにできるので。」と優しく言ってくれたので安心した。

美容師さんはまず私の髪を少しずつ分けて、いくつもの束にして結んだ。それはまるで、大事な贈り物をラッピングするかのような慎重さで、時間をかけて私の髪を縛っていった。鏡に映る自分を見て、切る部分の長さを目の当たりにすると、こんなに切るのかと少しひるんでしまった。だが、作業は続く。全ての髪を縛り終わると、美容師さんはその束の一つ一つを丁寧に切っていった。束が一つずつ切られていくたびに頭が軽くなった。そして、あっという間に短い髪になった。不思議と、もう自分の中にためらいや不安はなくなっていた。何よりも、自分の髪が誰かのウィッグになるという喜びの方が大きかった。これからこの髪は、誰かの大切な髪となり、毎日をその子のために過ごすのだ、と思うと嬉しかった。あの時、切った私の髪は、誰かのウィッグとして活躍してくれているだろうか、と今も時々考える。そして、その子を笑顔にする手伝いできていたら良いな、と心から思う。

何も持たない、何もできない無力な子どもに思えた私でも、誰かのためにできることはあったのだ。ノブレスオブリージュは、それぞれが余裕のある部分をみんなで出し合い、誰もが住みやすい世の中にしよう、そういう考え方なのだとは私は解釈する。私たちにできることというのは、案外難しいことではないのかもしれない。寄付という形でなくても、まずは病気や障害などについて調べ、知ってみること、また、街中で困っている人に手を貸したり、誰かと人権について話したりすることも一つの方法だと思う。自分にできることをして、社会の一員として誰かの役に立つことで、沢山の人の人権が守られるのではないかと、今私はそう思っている。